

風とアサギマダラの生活(2021.07.08)

—アサギマダラが風と共に生きていることの

証明実験施設 —

私が、山頂の岩峰から次々と風に飛ばされていくアサギマダラを見たのは1992年5月の中旬だった。もう少し詳しく書いておこう。その山は鹿児島県薩摩半島の南端の海岸に屹立する開聞岳(924m)であるが、薩摩富士とも呼ばれ、百名山にも選定されている秀峰である。その時私たち兄弟は、少年の頃住んでいた宮崎での兄の葬儀を済ませ、懐かしい日南海岸をドライブしようということになって足を伸ばしてここまでやってきたのだった。

天気も良く、途中から見え始めた開聞岳は、山好きな兄弟の登山意欲をそそり、揃って登ることになったのである。開聞岳は地図で見てもわかるが、全山緑の樹木で覆われていて頂上だけが岩塊となっている秀麗な山である。頂上に出ると一気に視界が開けてさえぎるもののない360度の眺望であるが、その半分以上が太平洋で、そのスケールの大きさに圧倒された。

ふと気が付いてみると、蝶が翔んでいるではないか。アサギマダラだった。頂上の岩塊の周りを翔んでいたが、その時吹いてきた南風に乗って飛ばされていった。私には『暑い暑い! もっと涼しいところはないの...』と言っているように聞こえた。そのあとも6頭が次々と現れては南風に飛ばされていったが、よく注意してみると、足元の森の中から上がってくるアサギマダラは、翅を一文字に開いて羽ばたくこともなく上がってくるのだった。今にして思えば、この時が『斜面上昇風』との初めての出会いだった。

それから4年経った1996年の夏に、私はアサギマダラを調べる会に入会してアサギマダラのマーキング調査に参加することになるのであるが、開聞岳で見たアサギマダラと風との関係は、終始私のアサギマダラの観察に影響してゆくことになるのである。

アサギマダラのマーキング調査に参加して今年で26年になるが、その多くはレポートや論文にまとめて、このホームページに収録してある。その中でもアサギマダラの生活と密接な関係にある『斜面上昇風』については、明確な目的をもって施設を設置し、これから3年間継続観察することにより、私の持論を検証した

い。

平年の気温の推移でアサギマダラの秋の南下シーズンを迎えた場合、中部以北で越夏繁殖したアサギマダラは、種固有の移動の方向性により南西に南下すると、海に遮られて北陸南部の福井県の辺りを通り、滋賀県北部から丹波高原を通して、多くは四国へ渡るものと思っている。

私には京都市右京区嵯峨水尾のフジバカマ畑で8年間に18,732頭のアサギマダラを捕獲し、標識してきた実績がある。京都西山はその山続きで、南下するアサギマダラの通り道になっていると考えているが、その山腹(標高約200m)に作ったフジバカマ畑に果たしてアサギマダラはやってくるだろうか。



開聞岳 (鹿児島県指宿市開聞十町・標高924m)



京都西山中腹のフジバカマ花壇